56　あらざらむ　この世のほかの　思ひ出に　今ひとたびの　逢ふこともがな

和泉式部

〈声に出してよんでみよう〉

アラザラン　コノヨノホカノ　オモイデニ

イマヒトタビノ　オーコトモガナ



海辺

＊「**む**」は、「**ン**」とよみます。古くは、撥音の「ン」にあたる かな はなく（五十音図やいろは歌[1] にも「ん」の文字はありませんね）、「む」で代用したり、表記しなかったりしていました。

＊語頭以外の**ハ行**の文字、つまり、語中・語尾の「は・ひ・ふ・へ・ほ」は、**ワ行音**「ワ・イ・ウ・エ・オ」でよみます。[2]　助詞 の「は」も、現代語と同様、「ワ」とよみます。これを、「**ハ行転呼音**」と言います。

＊**「ア段の音＋う／ふ」**は、**「オー」**とよみます。古代には、一つの単語の中での母音連続はなかったのですが、平安時代頃から出現し始め、それがやがて一つの長母音に変化するという現象が起こってきたわけです。しかし、この頃は［au］は［ɔ:］（**開音**）、［eu］［ou］は［o:］（**合音**）という区別があったのですが、17～18 世紀頃には、この開合の区別もなくなり、現在に至っています。

〈どんな意味だろう〉

この世からは、もうすぐ私はいなくなる・・・

あの世に行った時、この世の思い出にするために、

せめてあともう一度、あの人に逢いたい！

＊　「ざら」は打消の意の助動詞、「む」は、仮定・婉曲を表す助動詞です。

＊　「もがな」は、願望を表す終助詞です。

〈解説〉

病床で、死期が間近と悟った時の歌だと伝えられています。まもなく自分はこの世から旅立たなければならない、自分がこの世に生きていた精一杯の証として、恋人とのいま一度の逢瀬がほしい、という歌です。生命の瀬戸際まで、恋の炎を燃焼し尽くさずにはいられない、情熱的で激しい詠みぶりの歌です。あなたが、男性で、このような歌を送られたらどうしますか？　広く大きな愛で、女性の情熱を力強く受けとめますか？　それとも、激しさに辟易して、しっぽを巻いて退散してしまうでしょうか？　恋多き女性と呼ばれながら、和泉式部の歌には、どこか孤独の影があるのも、彼女を受けとめきれる男性を求めてのことだったのかもしれません。

〈作者と出典〉

作者の和泉式部は、10～11 世紀頃の女流歌人。父は、大江雅致。恋多き、情熱的な女性として有名です。最初の夫は、和泉守の橘道貞。和泉国は、現在の大阪府の南東部で、守は、その国の長官、現在で言えば都道府県知事にあたります。和泉式部という女房名は、この、夫の役職名から採られたものと思われます。二人の間に生まれた娘が、小式部内侍（→「60 大江山」）です。その後、和泉式部は、為尊親王・敦道親王との恋に落ちてゆきました。敦道親王との恋愛を物語風に記した日記が、『和泉式部日記』です。やがて、和歌の才能をかわれ、時の権力者である藤原道長の娘で一条天皇の中宮の彰子に、女房として出仕するようにもなりました。道長が、和泉式部の評判を聞き、その扇に「浮かれ女」と書いた、というエピソードも伝えられています。その後、藤原保昌と再婚したのですが、晩年の消息は不明です。



和泉式部の歌としては、次のようなものも有名です。

黒髪の　乱れも知らず　うち臥せば　まづかきやりし　人ぞ恋しき

（黒髪が乱れるのもかまわず、嘆きのあまりうち臥すと、真っ先に恋しく思われるのは、この黒髪をかき撫でてくれた人だ。）

つれづれと　空ぞ見らるる　思ふ人　天くだり来む　ものならなくに

（所在無く、空を思わず見てしまう。恋しく思う人が、天から下りて来るわけでもないのに。）

物思へば　沢の蛍も　我が身より　あくがれ出づる　魂かとぞ見る

（物思いに沈んでいると、沢を飛び交う蛍も、私の身体から遊離してさまよい出た魂ではないかと見ることだ。）

暗きより　暗き道にぞ　入りぬべき　遥かに照らせ　山の端の月

（暗い道から、さらに暗い道に入って行ってしまいそうです。行く道を遥かに照らしてください、山の稜線にかかる月よ。）

この「あらざらむ」の歌の出典は、4番目の勅撰和歌集（天皇の命令で編集された和歌集）である『後拾遺和歌集』（1086頃成立）です。

---

1 「いろは歌」は、10世紀末から11世紀頃成立したと考えられているもので、当時使われていた かな 47文字を1度ずつ使って作られた、次のような歌です。

いろはにほへと　ちりぬるを　わかよたれそ　つねならむ

うゐのおくやま　けふこえて　あさきゆめみし　ゑひもせす

現代では使われていない かな がありますね。「ゐ」はワ行イ段、「ゑ」はワ行エ段の音で、現代ではそれぞれ「イ」「エ」と読みます。また、当時は、清音と濁音の区別は表記上はありませんでした。濁点や漢字をあてはめて意味を示すと、次のようになります。

色は匂へど　散りぬるを　我が世誰ぞ　常ならむ

有為の奥山　今日越えて　浅き夢見じ　酔ひもせず

また、発音は次の通りです。

イロワニオエド　チリヌルオ　ワガヨタレゾ　ツネナラン

ウイノオクヤマ　キョーコエテ　アサキユメミジ　エイモセズ

内容は、仏教の経典から採られたものと言われ、現代語では大体次のようになります。

花の色は美しく輝いているが　花は散ってしまうのに

この世で一体何者が　常に変わらずにいられるだろうか（すべては無常である）

いろいろの因縁により生じるこの世を　今日生きて（しかしいつかは死んでゆく）

浅い夢を見たりはするまい　幻のようなこの世に酔ったりはしない

但し、ここで示した以上の解釈には、異説もあります。

[2] ハ行の子音は、8世紀頃に [p] から [Φ]（現代語の「フ」の子音）に変化し、やがて11世紀頃、前後を母音にはさまれた語中・語尾の [Φ] が [w] と発音されるようになりました。なお、[Φ] が [h]（現代語の「ハ・ヘ・ホ」の子音）に変化したのは、17世紀頃と推定されています。